

SHOW HEY シネマールム

★★★★★

めぐりあう時間たち (The Hours)

配給／アスミック・エース、松竹

2003 (平成15) 年5月27日鑑賞

Data

監督：スティーヴン・ダルドリー

出演：ニコール・キッドマン／ジュ

リアン・ムーア／メルル・ス

トリーブ

👁️👁️ みどころ

ニコール・キッドマンが念願のアカデミー主演女優賞を獲得した作品。1923年、1951年、2001年という異なる3つの時代で3人の女たちそれぞれの1日を描いたもの。それを結ぶ軸は、イギリスの女流作家ヴァージニア・ウルフが書いた『ダロウェイ夫人』。地味で難しい映画だが、奥深い。しかしその理解のためにはかなりの勉強が不可欠。

＜3つの時代、そして3人の女、3人の人生＞

この映画は3つの時代、すなわち1923年、1951年、2001年における3人の女、すなわちヴァージニア・ウルフ（ニコール・キッドマン）、ローラ・ブラウン（ジュリアン・ムーア）、クラリッサ・ヴォーン（メルル・ストリーブ）の1日の人生を描くことによって、この3人の女性たちとそれを取り巻く人物たちの人生そのものを考えるという非常に難しい構成の映画。

そして、3つの異なる時代の、何の関係もない3人の女たちを結びつけるものが、作家ヴァージニア・ウルフの書いた『ダロウェイ夫人』（1925年）という小説だ。

1923年6月のある日、作家ヴァージニア・ウルフは、1人書斎でタバコを吸いながら物語の構想を練り、自分の世界に入っていた。そして『ダロウェイ夫人』の書き出しの文章が、彼女の口でつぶやかれた。「ミセス・ダロウェイは言った、花は私が買ってくるわ・・・」

1951年、ロサンジェルスに住む妊娠中の主婦ローラ・ブラウン。彼女は『ダロウェイ夫人』の愛読者。ローラは優しい夫と可愛い息子に囲まれて幸せな生活を送っているはずだったが、実は理想的な妻を演ずることに疲れ切っていた。しかし今日は夫の誕生日。

ケーキを作ろうと思いついたローラは、夫を送り出した後、息子と共に取りかかったが……。入水自殺をしたヴァージニア・ウルフと同じように自殺への誘惑にかられたローラは、ホテルの一室に入り、『ダロウェイ夫人』を開いた。そして1人ベッドの中で、『ダロウェイ夫人』を読んだ。「ミセス・ダロウェイは言った、花は私を買ってくるわ……。」。しかし……。

そして、現代の2001年、ニューヨーク。詩人であり、クラリッサ・ヴォーンの恋人であったサリーはエイズに冒されていたが、今日は受賞式。そのサリーから「ミセス・ダロウェイ」と呼ばれていたクラリッサは、受賞式の後のパーティを企画し、慌ただしい1日が始まろうとしていた。この日のスタートは、彼のために花を買うこと。「サリー、花は私を買ってくるわ」と呼びかけて、クラリッサは出かけていった……。

こんな3人の女たちそれぞれの1日のスタート。それは特別な1日かもしれないし、毎日繰り返されていく平凡な1日にすぎないかもしれない。しかし、その1日には彼女たちそれぞれの人生が凝縮されていた。そして、この3人の女たちのその1日も、やがて終わりを迎えるのだ……。

<作家ヴァージニア・ウルフ>

ヴァージニア・ウルフは1882年にイギリスで生まれた女流作家で、1915年に処女作『船出』を出版し、続いて『夜と昼』、『ジェイコブの部屋』などを発表した。代表的な作品は、『ダロウェイ夫人』、『灯台へ』、『波』などで、イギリスの近代小説の革命を成し遂げた作家だと言われている。『ダロウェイ夫人』は1925年に出版されたもので、パンフレットによると、「ヴァージニア・ウルフは生涯、特異なことをするわけではない人々を見事に描いた」作家とのことだ。

<アカデミー主演女優賞のニコール・キッドマン>

ニコール・キッドマンが演ずるこの映画の主人公の1人は、ヴァージニア・ウルフその人。創造の苦しみに悩み、精神に異常をきたしながらも、『ダロウェイ夫人』を構想、執筆中のヴァージニア・ウルフは、1923年の今、夫レナード・ウルフと共に、ロンドン郊外の静かな田舎町リッチモンドに住んでいた。

ヴァージニア・ウルフを演ずるニコール・キッドマンは1967年生まれだから、現在36歳。そして、1882年生まれのヴァージニア・ウルフは1923年時点では41歳だから、ニコール・キッドマンは「実物」より少し老けた年齢の主人公を演じていることになる。しかし、精神に変調をきたしながらも、必死に作家として自分の世界を創造しようとしているヴァージニア・ウルフを演ずるのだから、その役づくりはすごく難しい。しかも、セリフがたくさんあるわけではないから、ヴァージニア・ウルフという人物の本質をその表情や仕草で伝えていくことは難しい作業だ。しかし、ニコール・キッドマンはこの役柄を見事に演じ、2003年第75回アカデミー賞では、『エデンより彼方に』のジュ

リアン・ムーアや『シカゴ』のレニー・ゼルウィガーを押しつけて、見事念願の主演女優賞を獲得した。

＜この映画での主演女優賞には少し異論あり・・・＞

しかし、私としては、この映画でのこの受賞にはすこし異論がある。

その理由は、第1に、この映画では、3人の女たちは平等に3分の1ずつの比重で描かれているのだから、必ずしもニコール・キッドマンが「主演女優」とは言えないのではないかということだ。

第2に、ニコール・キッドマンへの主演女優賞は、2001年の『ムーラン・ルージュ』の熱演に対して与えたかったと思うことだ。

第3に、この映画でニコール・キッドマンが主演女優賞を獲得したのは、女流作家ヴァージニア・ウルフという難しい役柄を見事に演じた演技面が評価されたものと思われるが、それ自体には異論はないものの、ニコール・キッドマンのファンである私としては、やはりその美しさや華やかさを称賛して、主演女優賞を与えたいと思うことだ。その意味でも、『ムーラン・ルージュ』での輝くばかりの美しさのニコール・キッドマンに主演女優賞を与えたかったと思うのだが・・・。

＜2人の女主人公や脇役陣も熱演＞

この作品でニコール・キッドマンがアカデミー主演女優賞に輝いたが、ローラを演ずるジュリアン・ムーアやクラリッサを演ずるメルル・ストリープの演技も素晴らしい。

このことは、2003年第53回ベルリン国際映画祭で、ニコール・キッドマン、ジュリアン・ムーア、メルル・ストリープの3人が共に銀熊最優秀女優賞を受賞し、2002年第28回ロサンジェルス映画批評家協会で、ジュリアン・ムーアが主演女優賞を受賞していることから裏付けられる。

ジュリアン・ムーアは、『マグノリア』（1999年）で注目され、『ハンニバル』（2001年）や『シッピング・ニュース』（2001年）に出演した。そして2003年第75回アカデミー賞では、『エデンより彼方に』（2002年）で、ニコール・キッドマンやレニー・ゼルウィガーと並んで主演女優賞にノミネートされた華やかな顔立ちの女優だ。

そして、メルル・ストリープは1949年生まれだから、私と同じ年。『クレイマー・クレイマー』（1979年）でアカデミー助演女優賞を、『ソフィーの選択』（1982年）でアカデミー主演女優賞を獲得し、その他アカデミー賞候補13回というものすごい大女優だ。

私がよく知っているのは、『マディソン郡の橋』（1995年）での彼女の熱演。クリント・イーストウッドが監督し、自ら出演したこの映画での彼女の演技は素晴らしかった。

この2人の他、脇役たちの演技もみんな素晴らしいのひとこと。

＜地味な映画＞

ニコール・キッドマンがアカデミー主演女優賞を獲得した作品でありながら、映画館の入りは半分から3分の2位。女性向きの映画と思われるためか、アベックの他、確かに女性同士の客も多い。パンフレットやチラシでは、「深い孤独の中で、懸命に生きる女性たちの美しい魂が見事に描かれている。」「めくるめく日常のつながりを見てしまった。ただ、花を活ける人に永遠を感じただけなのに。」「時」というもののサスペンスに打ち震えました。優れた映画って、こういう映画の事をいうのです。」等と絶賛されているが、3人の役柄上、その顔写真はみんな「老け顔」だから、男の私からみれば、魅力やインパクトに欠ける。確かに、この映画を観れば、作品の深みがあることは間違いないが、要するに地味なことは否定できない。

＜難しい映画＞

最大の問題は、日本人には難しすぎる映画だということ。

第1に、イギリスの女流作家ヴァージニア・ウルフを知っている人が少ないはず。

そして、第2に、その代表作である『ダロウェイ夫人』を読んだことがある人は、大学でイギリス文学を研究した人とか、よほどの文学青年、文学少女でなければいけません。

したがって、ニコール・キッドマンが、わざわざその美貌を隠して、精神に変調をきたしている40歳頃のヴァージニア・ウルフを演じて、また、『ダロウェイ夫人』の書き出しの有名な一節を口ずさんでも、すぐにピンとこないのは当然だ。

これは例えば、『源氏物語』で光源氏が理想の女性とした紫の上をモチーフとして、その100年後、1000年後を描いても、外国人にピンとこないことと同じでやむをえない。

また宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』が、アカデミー賞で長編アニメーション映画賞を獲得して大評判となったが、これについて私は、本当に『千と千尋の神隠し』が描いている世界をアメリカ人が理解したのか、それとも単なる宣伝効果の結果なのか疑問がある。

＜勉強が不可欠＞

この映画の良さを本当に「理解」するためには、最低限パンフレットを「熟読」することが不可欠。そしてそれ以上にこの作品を「語る」ためには、『ダロウェイ夫人』を読んで、ヴァージニア・ウルフとはどんな作家なのか、またどんな小説のスタイルを確立したのかを学習することが必要だと思う。

そういう意味で、私は、多くの映画評論家や芸能人がパンフレットやチラシの中で数行で絶賛の言葉を掲載しているのを全然信用することができず、単なるキャッチコピーにすぎないと思っている。とにかく、この映画を理解するためには、ヴァージニア・ウルフという作家に興味を持つことが不可欠だ。

＜音楽は最高＞

こんな難しいテーマの映画、そして3つの時代の3人の女の1日の人生を描くという難しい構成の映画をうまく見せるためには、脚本の技術が大切だが、それとともに大事なのが音楽。冒頭では3人の女たちの1日のスタートの展開を、会話のないまま、音楽で物語っていくが、まず、この手法が素晴らしい。音楽だけで、3人の心の動きが手にとるように伝わってくるから不思議だ。

そして、ストーリーの節目節目でピアノの重音奏を基調としたドラマティックな音楽が、それぞれの女たちの人生を見事に示している。最後の字幕が流れる中で演奏される音楽も素敵。この映画に限っては(?)、最後の音が消えるまで絶対に席を立ってはダメ。必ず最後まで音楽を聴いて下さい。

2003 (平成15) 年5月28日記